

川僧講人天眼目抄のホドニ・ニヨツテ をめぐって

古 田 雅 憲

A Matter Connected with "hodoni, ni-yotte" in
Nindenganmokushō

Masanori Furuta

曹洞宗太源派の僧、川僧慧済の講述に関わる人天眼目抄は三つの伝本を有する。一に東京大学史料編纂所蔵本、二に足利学校遺跡図書館蔵本、三に松ヶ岡文庫蔵本。これら二種三本の抄物は、周知のように、同一講義を別人が筆録、整理、作成した聞書と目されているものである。^①すなわち、文明三年十月十五日―同五年六月十九日の間（実質六ヶ月）、遠州一雲斎にて行なわれた『重修人天眼目』についての川僧講、そこに参じた二人の某僧がそれぞれに筆録し、それを基に整理・作成したものである。^{②③}（その後の写本）が一、あるいは二、三であるというのである。

そのような成り立ちの聞書二種（史料本と足利本系）を比較・対照する作業は、様々な重層的構造をもつ抄物の言葉の中でも、講者と筆録者（聞書作者）の関わり方如何、という面での実態を考える端緒になろうかと思われる。一体、抄物の本義を「注釈」という一点に求めるならば、それは思想内容の理解・伝達が第一にあるわけであるから、直接的に内

容に関わり深い要素については講者の言葉が重んじられ、筆録、抄物として仕上げる際にもそれが採られよう。それにしても「もの言いよう」とでも言うべき要素については、なにも講者のそれであるべき必然性はなく、むしろ筆録者の使い慣れた形式の方が経済的でもあり、最終的に聞書抄物として成った際にもそれが色濃く現われるのではないか。もちろん抄物は単に内容理解の具に留まらず、特に禅門のそれはその営み自体が修業でもあるわけで、その場合、師僧の語る内容とともに、師僧の語り口までもが修得されるべき対象となり、結果、講述の完全な再現が目指され、そこに筆録者の姿は希薄となる。ともあれ、講者と筆録者の言葉の「綱引」をめぐる問題を考える上で、川僧講人天眼目抄の二種聞書の比較・対照は当面最も効果的な作業と思われる。^④

さて二種聞書の文体的相違は、既に説かれている如く、史料本は講述の実況めいて饒舌であるのに対し、足利本系は要点略記とも言うべきもの。考えてみれば「聞書」とは言うが決して講述時の速記などではなく、必ずや原ノートの整理という段階を経ているのに相違なく、とすれば二種聞書の文体的差は筆録時点に於ける二人の受講態度と、更には八原ノート✓を整理し聞書として完成してゆく際の意図・意識の差違によって生ずる筈のものである。言わば史料本はいかにも講述めかして入念に化粧を施したものの、対して足利本系は「スッピン」——ある意味では、いかにも講述そのままらしい史料本にこそ筆録者の手が多く加わっていることと見ることもできる。史料本にも大量に見出される漢文部分などは、そのような位置において扱えられるべきであり、また足利本にしても要点略記とはいえ、むしろ筆録者の操作の比較的少ない、生な部分を多く持つものとして評価したい。両者の示す「口語性」は相互に補完されつつ語られるべきものであろう。

ともあれ川僧講人天眼目抄二種聞書の対照に際して注目すべき点を見すれば次の通り。

- (1) 同一講述の別人聞書として、抄物の言葉の重層的構造——講者の言葉と筆録者の言葉とを立体的に考える契機を有する。
- (2) 成立上、遠州の言葉に関わる。もつとも生の遠州方言と知識人の言葉との距離如何。

(3) 文明期の講述に基づく点、東国系のみならず、抄物全般の中でも重要な時点にある。

かつて語の二、三について述べた⁽⁵⁾。ここでは原因・理由の条件句「ホドニ」と「ニヨツテ」の関係について、先述の通り、講者と筆録者の言葉の「綱引」という観点から報告したいと思う。(なおホドニとニヨツテの交替については関西語系の抄物群、キリシタン資料、狂言等を通してされた小林千草⁽⁶⁾氏の、また東国抄物全般の原因理由の表現については来田隆氏の御論考があるので参照されたい。)

史料本、足利本系を問わず、原因・理由の条件句には様々な形式が見られる。例えば「バナなどは多く見えるが、原因・理由の意味と断じにくい、軽いニュアンスを示すかに思われるものが大半、が、一面で次のような例もある。

- ▼天曉賊人投古井 賊カ夜カアクレハカクレ処カナイ程ニ井ノ中ニ落チ入タヨ (史259)
- ▼花厳云天曉賊人投古井夜カ明夕程「賊人カ古井ニ隠タヨ (足16、松85)
- ▼师云截「断衆流ヲカ雲門ノ全底タソ截断衆流ヲタニシツレハニ不レ容擬議ニ凡聖無路情解不通此證據ヲ引タソ (史240)
- ▼衆流截断シタ程ニ凡聖モ情解モ通路ヲ絶シタソ情解ノ通セヌ證據ニ以下ノ問答共ヲ引タソ (足11、松81)
- また、トコロデ、故ニ、サカイニ、アイダ、イヲモツテなど、小林論

文に挙げられたものは数の多少こそあれ見出すことはできる。それらは二種聞書の対応部分に共通して現われている場合もあれば、次のように別のものが対応する場合もある。

- ▼師語話ニ云第六ノ意識テ見タ程ニ妙觀察タソ功用ニハ落ヌソ 見トアル程ニ見ニ取ツイテ眼ナントノ句ヲサシ玉フサデワアルマヂヒゾト云テ (史565)
- ▼意識ヲ受ル処テ見聞ニ惑セラル、ゾ (足118、松173)
- ▼転側^{スル}木人驚夢破^ス (中略) 木人ノキリ、トヲキカヘサルサカイニ夢ヲ破レタソ (史290)
- ▼転側木人驚夢破木人カ正^{シキウ}中テ転側シタゾキリ、ト寝カヘリヲ打ツ処デ夢ガ破タゾ (足27、松94)
- ▼师云前生ノ因智ニ依テ大果ヲ成スル程ニコソ因智ノ報答ナレ (中略) 前ヘノ因相ニ依テ大果ヲ得ル程ニ又ハ因相トモ名ツケタソ (史481)
- ▼仏ノ妙相ハ前因真智ノ報ニ依テ大果相ヲ得ル也 (中略) 前世ノ因ニ依テ三十二相ヲ具スル故ニ因相ト云也 (足90、松154)
- その他にサテコソ、サアラウニハなどがホドニなどと対応している例も少しく見える。
- ▼师云夢ノ中ニ縛ラレトモ覚レハ何ニモ無ソ眼ヲ病ム時ヒカノトハスレトモサムレハ何モ無ソサテコソ掌ノ間ニ十悪カ十善ト成タソ (史485)
- ▼八万四千煩惱モ凡夫モ皆夢ノ中ノ桎梏タソ醒レハ无ソ病眼ノ空花タソ愈レハ无ソサル程ニ反ニ覆掌ノ間十悪モ成ニ十善 (足91、松155)
- ▼又花厳経曰如来不出世亦無有涅槃 (中略) 説破曰如来ナラウニハトコヘ出世シトコヘ涅槃セウス (史140)

▼花嚴經云如来——涅槃如来ナル故ニドコニ出世シドコへ涅槃セウズゾ
(松49、足ナシ)

▼师声ヲハゲマシテ云ツウシテ大藏經ニハノセラレヌソサアラウニハド
ノ經ヲモカ、ヌソ (史553)

▼大藏經ニ引テ載セ得ヌ程又ドノ經中ニモ皆載セタゾ (足114、松170)

そのような中、原因・理由を表わす形式として数的にも意味的にも明確な姿を見せるのが、ホドニ(含、程ニ)とニヨツテ(含、ニ依ツテ、ニ依テ、ニ依、ニヨテ、依)である。最初に結論めいたことを示せば、筆録者の言葉を反映すると思われる部分は史料本であれ足利本系であれホドニ専用であるのに対し、講者の言葉をより強く反映すると思われる部分ではニヨツテが多く現われてホドニと比肩する勢いを見せているのである——川層は何らかの基準によってホドニとニヨツテを使い分けつつ講じ、それと離れて筆録者が書く際には二人ともホドニを専用したということか。この両者の関係については小林千草氏が関西語に於ける交替の様相を詳しく述べておられ、近世初期の口語世界でニヨツテはホドニにとつて替わり、ホドニは「推量」に下接する「ウホドニ」に限って保たれたものと見られる。そのような事柄を考えあわせた時、川僧講述をより強く反映したと思われる部分でのニヨツテの存在は次の二点に関連して気になるところである。すなわち、文明という時間的側面において、そしてまた遠州という地理的側面において。

まずは次の例を検討いただきたい。

▼慈明惣領 师云皆カメウスル処ヲカトメヌソト呵責ソ汾陽慈明ハ師
弟子ヲホトニ汾陽ハ父タルニヨツテ正中来ヲ先ッ置慈明ハ子タルニヨ
ツテ偏中正ヲ先ッ置タソ偏中正ト蹈テ入タソ幽玄ノ底ヘツウシテ極メ

川僧講人天眼目抄のホドニ・ニヨツテをめぐって(古田)

タソ(史280)

▼慈明惣領△紛陽ハ父タルニ依テ正中来ヨリ始メ慈明ハ子タルニ依テ
偏中正ヨリ始メタゾ父子回互シタゾ偏中ヨリ正ニ皈スル程ニ幽玄ノ底
ヲ(極メタゾ) (足23に一部脱文あり。松92で補う)

右例中、ニヨツテは「父タルニヨツテ」「子タルニヨツテ」の形で、二種聞書に共通・類似の文脈に於いて現われている。対してホドニは、史料本中「師弟子ヲホトニ」、足利本系中「偏中ヨリ正ニ皈スル程ニ」の形で現われているが、それぞれ相手方の本に現われぬ、言わば独自の文脈に於ける出現である。このような分布——実は後に示すようにホドニは共通文脈にも現れてくるので、正確には、二種聞書に共通・類似の文脈に於いてはホドニとニヨツテが併用、独自の文脈に於いてはホドニが多用されるという分布の差が全体を通じて存在するようである。

まずはニヨツテの実例若干。

▼雲門 輓出木毬迷了眼 此レハ雪峯ノ事タソ雲門ハ雪峯ノ嫡子
タニ依テ云タソ (史674)

▼雲門輓出木毬迷了眼 雲門ハ依ニ雪峯ノ弟子ニタルニ先ッ取出タゾ雲
峰ノ事 (松203。足153は乱れあり)

▼师拳及横ニ右臂 曰看々三尺雪——寒 提ニ携天下 断タソ達磨ノ處
テ臂ヲ断タニ依テ一天下達磨宗ト成タソ断スルハ天下我カ物ニハナル
マイソ (史686)

▼拳レ臂云看々三尺雪寒徹骨ニタゾ提ニ携天下ト云ハ二祖ノ隻臂ヲ断タ
ニ依テ天下皆達磨宗ト成タソ天下ヲ手裡ニ収ヌカ (足162、松208)

▼如何是相生(中略) 何忽生山河大地ト云モコ、タソ俄ニ山河カ出来タ
テワナイソコツチガ眼ヲ開テ看ルニヨツテヨ (史461)

▼如何是相生忠云山河大地相モ心ニ対スルニ依テ山河大地ト露レタソ
(足83、松149)

▼北地黄河徹底_ニ渾_ル师云(中略) 此頌ワ二路アルゾ黄河ハアマリ水ガ
ハヤイニヨツテ濁ルソ底ヲホルホドニヤワ足ハ立テラル、チツトモ足
ヲハタテハマジヒソ(史47)

▼黄河徹底渾ト云ハ黄河ハ急ニ流ニ依テイツレモ底ヲ掘テ流ル、程ニ渾
ルソ(松17、この臨濟宗部分、足は欠卷)

▼秦宮映_レ膽_ニ寒_シ 师云抄ニ色々シタレトモ鏡トシタガヨイソ照邪鏡ト
云カアルホトニ野心ノ物ガアレハ此ノ鏡ニウツリ_レスル也(中略)
清虚ナニヨツテヨク_レウツルゾウツルカアタソ

▼秦宮膽映寒秦宮ハ前ニ秦台ト云如ク照邪鏡ノ事歎(中略) 依_ニ鏡清虚_ニ
影ガ現ズルゾサテ虚処ガ冥ナソ(足66、松133)

紙幅の都合で全て示せないが、これらの他に14例を見る。また次のよう
なものも右に準じて見てよいか。¹⁰⁾

▼师曰(中略) 腰ニ石ヲ結付テ身ヲ重クメシタ、カニ辛_レ苦難_レ勞_レラシタソ
爰ヨリ衣鉢ヲハ得タソト(史71)

▼腰傳_ニ付石_ヲ踏_{タソ}如_レ此_ニ辛_レ勞_レシタニ依テ傳_レ得_{タソ}貧_レ梅衣鉢_ニ(足154、
松202)

▼破曰ニクヒモイトヲシヒモ貪モ瞋モコ、ヨリタソ此レカ肉眼ノ只中タ
ソ(史680)

▼憎愛瞋表貪欲カ肉眼ノタ、チナソ以_ニ此_ニ眼_ニ見_ルニ依テ人ノ惡イトウレ
シイモ貪欲モ瞋表モ生スルソ(足159、松206)

以上のように、二種聞書に共通・類似の文脈に於いて現われるニヨツテ
は21ないし23例である。

また次の例は本来ならば二種聞書共通部分として数えられる筈であつ
たろうか。

▼投子一隻履両牛皮(中略) 五月廿五日予不逢懸河河井方へ母儀点海
妙愛ノ佛事ノ用意ニ罷越留守ニ此聽聞ハアリ(史678)

▼投子一隻履両牛皮(中略) 白雲ハ楊岐ノ子タルニ依テ如_レ此云タソ
(足158、松205)

さらに次のように文脈自体に多少のズレがあつて、その結果、ニヨツ
テの有無を生じたと見られる例がある。

▼师云(中略) 日本テワ延喜天曆ヨイ時代ニ万卷積_レ功詩書ヲ窮積_レ功外
挙_レ名譽(史418)

▼日本ナラハ延喜天曆カ、ル時代万卷ノ書ヲ学_タニ依テ彰_レ名譽_ニ(足43、
松112)

▼更若躊躇轉如鈍置 师乃曰殺人不眨眼是ヨリ末へハ註脚タソ(史153)

▼更若躊躇轉加鈍置殺人不眨眼投機不妙ト云ヨリ鈍置ニ至ルマテハ曲為
今時周遮示誨スルニ依テ理ヲ味シ投機不妙ヲ天然上士ナラハ人ノ瞞ヲ
受マジゾ理貫帯者即正位也是ヨリ以下ハ皆理貫ノ注脚ダゾ(松54、
足欠卷)

前者、史料本が原典の文言「万卷積功彰聖代」を利用するために漢文然
となり、結果、ニヨツテを失つたもの。後者、史料本が随分と端折つた
ところを足利本系はちゃんと述べているので違いを見たもの。この類例、
2例あり。¹¹⁾

また次のように足利本系で長い文脈を有するものが、史料本で語釈風

の短いものに対応し、結果、ニヨツテを見ない場合がある。

▼朝生 学問、詩書、德行全^レ、徳ト云ワ身ニアリ行ハ定タマルマチヒソ
德行備タカ全ソ 金門^レ投^サ策 色々ニアレトモ只ラソツメワ及第タ
ソ紫微班 紫微宮内裏タソ列班シタルナリタソ (史428)

▼朝生学ニ問詩書、德行全^レ金門^レ投^レ策紫微班タソ詩書ヲ能学テ徳ト行ト
兼全イニ依テ射策ヲ登第シ列紫微班ニ内裡ヲ諭^三天上ノ紫微宮ニ(足46、
松115)

この類、他に3例あり。¹²⁾

最後に史料本の成立事情に関わる1例がある。すなわち坪井美樹氏の述べられた通り、史料本は曹洞宗途中に内容が前後混乱したり、脱落があったり、ために史料本オリジナルの注釈と重複する形で足利本系の本文がそのまま引き写されている箇所さえあるのだが、この1例はその、多分に操作されたるう箇所に見えるものである。

▼垂^レ非^レ有^レ為^レ不^レ是^レ無^レ語^一 (中略) 师云為物作則用拔諸苦如臨宝鏡カミ
ニ影ノチャツくトウツル如クナソ (中略) 是ワ形影相對シテ道フタ
ソ万象ノ移ル心ナク鏡ノ照ス心ナイソ (史339、史344には足利本系の引
写しあり)

▼垂^レ非^レ有^レ為^レ不^レ是^レ無^レ語^一ト云姿カ宝鏡ニ臨カ如ナゾ形影相觀鏡モ本尤為ナレ
トモ万形万像ガ臨ニ依テ影カ現シタゾ (足75、松121)

以上に示した10例の多くは何らかの事情で文脈自体をやや異にし、その結果、ニヨツテの有無を見るに至ったというものである。

そのようなわけで、次のような7例が——これらは共通・類似の文脈下
にありながら、相異なつた形式が使われており、「ニヨツテは共通・
類似の文脈下に見える」仮説にそわない確例ということになる。¹⁴⁾

▼黄竜老和尚有^レ箇生縁ノ語 山僧承^ニ嗣伊^ニ師曰伊ト云ハ黄竜々々ニ嗣^ダ
程ニ今日為^レ君拳シタソ (史194)

▼黄竜老和尚有^レ生縁語山僧承^ニ嗣伊^ニ今日為^レ君拳景福モ黄竜ノ弟子タルニ
依^テ生縁ノ語ヲ為^レ諸人拳掲シタソ (松67、足欠巻)

▼乃云声不^ス自声ニ色不^ス自色ニ (中略) 声ハ対聞ニ色対^ス見ホトニヨ (史
438)

▼其證拠ヲ云ニ声不^ス自声ニ色不^ス自色モ自ノ時声テハ无ソ眼ニ対スル
ニヨツテタソ (足51、松119)

逆に、史料本にのみ見えるニヨツテもあるが、これもやはり二種開書
間で文脈に違いがあつて、結果、ニヨツテの有無を生じたものか。

▼人天眼目 法眼宗 师諱ハ (中略) 法眼ノ文学ニ達シタニ依^テカウ道
フタソ (史513)

これは史料本にのみ見える冒頭部分で足利本系では全く触れない。また
次のような二例も。¹⁵⁾

▼又岩頭云追^レ物為^レ下却物為^レ上物ヲ逐ニ依^テアツチヘ轉ゼラル、ゾ
(史570)

▼岩頭云逐物為^レ下却物為^レ上ト有轉 (足118、松174)

▼私云 (中略) 當頭ハドチヘモソムカヌニヨツテ凡聖同居竜蛇混雜 (史
23)

この例は「私云」の部分で、川僧講述とは一応区別しておくべきもの
——春浦商量の問題等。

そのようなわけで、結局、次のような5例だけが共通・類似の文脈下
にありながら別々の表現形式を採つたものの確例である。¹⁶⁾

▼寰中天子塞外將軍师云号令正イニヨツテチツトモスキハナイソ (史
13)

▼慈明云實中——將軍令實中塞外共号令キビシイ程ニイキクッナキモセヌソ(松6、足欠)

以上に述べてきたように、ニヨツテが現われるのは、その前後も含めて二種聞書に共通・類似の文脈に於いてであることが原則的である。一方の聞書にのみ現われる場合の多くは、文脈自体が異なったり、あるいは特別の事情が存する¹⁷⁾。

次にホドニの現われ方について。数としては概ね史料本137例、足利本系166例ほどを見るようだが、そのうちの40例は二種聞書の共通・類似の文脈に現われる。一部を示す。

▼拳こぶし目便令三界静 師乃直上云(中略) マタ正ノ中ノ偏マホトニ三界ハ能ク収マツタソ(史279)

▼拳目便令三界静上視云(中略) 三界ハ偏ナレトモマタ正ノ中タ程ニ能ク静マツタゾ(足23、松92)

▼出門俱失利此ノ堅窮横遍ノ門外ハ無ソ只一門ノ内タ程ニ門ヲ出ツレハ俱失利ヨドコヘ出デウスソ(史488)

▼出門倶楽失利ドコモ此宗門ノ中タ程ニドコヘ出ウズゾ若門外ガ在テハ失利ヨ(足92、松156)

▼师云(中略) ナンテモ無イ事道イマワツタ程ニ眉毛ヲスツキト落尽シタソ(史586)

▼惜取眉毛ト云ハ(中略) 虚ヲ実ト傳ヘタ程ニ眉毛ヲ皆落尽シタゾ(足125、松178)

これら40例を除き、史料本97例、足利本系126例はそれぞれ一方の独自

の文脈下に現われていて、結果、他方の聞書の該当箇所には見えない。もちろん、その中にはニヨツテの場合同様、成立上の特別な事情によるものも少しくある。

▼偏中正演若玉容迷古鏡可笑牛更覓牛(中略) 一旦迷フタテコソアレ元ヨリ頭モ失セス騎リタル牛タホトニ牛モ失ナワヌソ(史273)

▼偏中正演若玉容迷古鏡ト云ハ頭ニ迷タソ(中略) 演若カ頭ヲ失タゾ騎タル牛モドコニ失タソ(足21、松89)

▼兼中到斗柄横斜天未晓(中略) 柄カ夜アケニハ西ヘ傾クソ(中略) 欲晓未晓ヌソ夜分ト云ワウスカ天晓ト云ワウスカ明ト云ワウスカ暗ト云ワウスカ(史289)

▼兼中到斗柄横斜天晓斗柄モ西ニ斜ニシテ夜モ漸ク明ケ方ナレトモ未キツカトハ明ヌゾ明ントシテ未明比タゾ夜分テモ無ク天晓テモ無イ程ニシカト明暗ニモ黑白ニモ片落ヌソ(足27、松94)

すなわち、ホドニは二種聞書の共通・類似の文脈に於いても現われるが、反面、いずれか一方の聞書にのみ——他方の聞書に見えない文脈に於いて現われることの方が多いようである。

先に示したニヨツテの現われ方と考えあわせると——独自の文脈下では史料本であれ足利本系であれ、概ねホドニ専用といってよい状態¹⁸⁾、共通・類似の文脈下ではホドニとニヨツテが2対1の比で併用されている状態と知れる。この二種聞書の成り立ちを思う時、前者は二人の筆録者に共通する、抄物を書く言葉を反映するものであり、後者は講者川僧の語りに深く関わるものであると考える次第である²⁰⁾。

それにしてもホドニとニヨツテの使い分け基準については未詳である。小林論文に「推量」下接の場合にのみホドニが保たれたというが、この二種聞書についてはホドニ・ニヨツテとも「推量」下接の例を見ぬので

判じ難い。が、次のような一例は如何。

▼鳥啼花笑幾回春 破曰拂々トスル程ニ幾春ヲカ経白蓮峯頂無消息(中略) 師曰拂々トスルニ依テ白蓮峯頂ノ消息ハ無ツ(史672)

▼鳥啼花咲幾回春鏡ノ塵ヲ拂ワウ々ドスルニ依幾回ノ春ヲカ過シツラウ依レ拂々白蓮花ヲハ遥推シ隔テ消息モ絶ヘ(足155、松202)

この箇所、足利本系の方が川僧講に近いかと思われる——史料本が「破曰拂々トスル程ニ」と変えたように思われるのだが、仮にそうであればそのこと自体がホドニとニヨツテの関係を物語つてはいないか。すなわち、両者はほとんど同類なのだが、敢えてこだわった際には、ホドニが「説破」として——相手に対して構えたもの言いとして、またニヨツテは淡々と語る文脈として相応しいというような、微妙なニュアンスの差を持つと史料本作者に意識されていた云々。

以上、川僧講人天眼目抄の二種聞書に見える原因・理由の条件句ホドニとニヨツテの関係について、講者と筆録者の言葉の「綱引」といった観点から述べたが、次の課題を残す——川僧の語りに深く関わって現われるニヨツテは、講述の背景に存する文明期遠州方言とどのように関わっているのか。想像は様々に膨らむが、もはや語るべき言葉を持たない。明らかにされつつある方言文法地図の精密な解釈なども大いに興味をそそられるものである。大方の御批正を乞う次第である。

〔注〕

- (1) 影印『抄物体系 人天眼目抄』(勉誠社、中田祝夫 196)。影印『松ヶ岡文庫所蔵禪籍抄物集 人天眼目抄』(岩波書店、古田紹欽 196)
- (2) 外山映次氏、中田祝夫氏、古田紹欽氏、影印の解説に於いて。
- (3) 史料本、春浦宗熙商量の問題(古田紹欽氏)は残る。
- (4) 前(2)ほか。
- (5) 拙稿「人天眼目抄の成立事情と言葉——二種聞書の比較を通じて」(筑紫語学研究1 199)
- (6) 「中世口語における原因・理由を表わす条件句」(国語学94 193)
来田論文は三年ほど前に成るが諸般の事情で未だ明らかになっていない。史259とは史料本影印259頁の意。他も同様。
- (7) 前(6)小林論文。
- (8) 影印頁数でのみ示す。(史—足松)の順。
▼77—欠29、350—78、417—43、422—45、460—83、462—84、486—91、568—119、575—122、627—141、659—150、672—155、674—156、675—156、203
- (9) 「Aニ依テB」の講述を「A。爰ヨリB」と整理したもの云々のように関連性を見たい。
- (10) ともに448—52、121に見える。ここは二種聞書間で注釈内容の前後錯綜する所でもある。
- (11) 126—欠45、147—欠50、147—欠52
- (12) 「人天眼目抄川僧講三本私見」(千葉大学教育学部研究紀要 199)
- (13) 他に、76処テ—欠29ニ依テ、224程ニ—676ニ依テ、658ニツイテ—149、198ニ依テ、669サテコソ—153、201ニ依テ、672程ニ—155、202ニ依テ。
- (14) 他に、203—欠20。
- (15) 他に、5ニヨツテ—欠3バ、6ニヨツテ—欠3バ、111ニヨツテ—欠40バ、588ニヨツテ—119、174シテ
- (16) 共通・類似の文脈下、二種聞書に同時に見えるニヨツテ21ないし23例。史料本にしか見えないもの5例、足利本系にしか見えないもの7例。また文脈の相違、特別の事情があつて史料本にしか見えないもの4例、足利本系にしか見えないもの10例。
- (17) 独自文脈に於けるホドニとニヨツテの数は、史料本で97対4、足利本系で126対10。

(19) 共通・類似文脈下に於いて二種聞書に共通して現われるホドニとニヨツテは40例対21例。

(20) 同時期の関西の抄物、例えば漢書抄ではホドニ241例・ニヨツテ1例、史記抄ではホドニ1,088例・ニヨツテ26例という(6) 小林論文)。史料本、足利本系とも総数ではそれに似たようなものだが、語りに関わる側面ではニヨツテが目立つ——その意味は何か。抄物の文体、語りのスタイル、「知識人」語、遠州方言の関わり、様々のことが思い起こされる。

—平成四年九月二十一日 受理—